Switch Rooming

『みんなのトイレ』から『わたしたちのスイッチルーム』へ

トイレを「次のステージへと、スイッチしていくためのレンタルスペース空間＝スイッチルーム」として再構築し、新しい都市機能として建築内に拡張する。

今回達成するSDGs：目標６「安全できれいな水とトイレを世界中に」を始めとして、新しいインフラ基盤をつくることもに全ての人のためにある建築を提案する。

DIAGRAM 形態ダイアグラム

1．動線や日照などを検討

2．トイレのボリュームを配置

3．機能を挿入し立体的に多様な空間を創出する。

ISOMETRIC 文化で彩られる１２８個

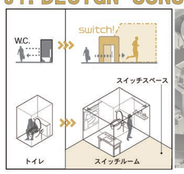
地下からのアクセス。終電後も人々の居場所として寄り添う。

非常時は街の防災拠点としても機能し、レンタルユーザーたちが避難後の生活を支える。

始めて訪れたスイッチユーザー。家具で彩られたスイッチルームの先には思いがけず自分好みの街の家具屋さんとの出会いがあった。

スイッチスペースの大小により生まれる、多様な空間レイヤー

01. DESIGN CONCEPT 2021年トイレは「スイッチルーム」に変わる

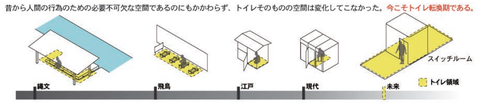


トイレは単に排泄行為としての場所だけでなく、面接の前やデートの前、勤務中のちょっとした休憩など、人がだれしも気持ちを切り替え、次の場所へと整え、準備していく最もミニマムな空間でもある。舞台が広がる池袋の街に対して、池袋の持つ文化へのアクセスや出発をサポートするべく、トイレを「次のステージへと、スイッチしていくためのレンタルスペース空間＝スイッチルーム」として再構築し、新しい機能として建築内に拡張する。この「スイッチルーム」を一定期間占有することで、都市の中の最小滞在時間空間としての個人の休息の地に留まらず、地域の企業やコミュニティが新たな事業を展開していく、街の準備空間としても機能する。池袋の発散点かつ中継地として、ものや人、社会を結び、まわしていく、「新たな都市機能」として展開していく建築を提案する。

地位や立場に関係なく誰もが必要とするトイレという行為を拡張し、スイッチルームとして再構築することで、High&LocalCultureが入り混じる池袋らしい建築を考えた。

■トイレの歴史とこれから

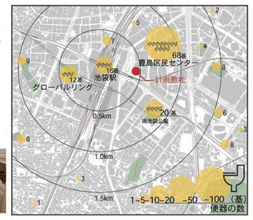
昔から人間の行為のための必要不可欠な空間であるのにもかかわらず、トイレそのものの空間は変化してこなかった。今こそトイレ転換期である。



02. BACK GROUND 文化発信の地「IKEBUKURO」×トイレ×未来

1.池袋トイレ事情

1日平均乗降者数が世界第2位という人口の集積地、池袋。文化発信の地として劇場や映画館、イベント等が多く開催されている多様性の街である。トイレという都市機能に目を向けてみると、４つの公園や豊島区民センターをはじめとして、各地に点がついていることが分かる。池袋においては特に、祝祭性のあるイベントの際に一度に多人数に利用されるトイレの個数に対するトイレ需要は高く、文化発信の拠点としての未来を描く上でトイレは重要な都市要素となるだろう。



2.トイレのイメージと使われ方

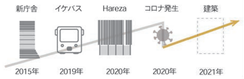
トイレには、街中にあるトイレ、お店の中にあるトイレ、友達の家にあるトイレ、自宅のトイレなど立地環境によって様々に設ふられてた。どれも同じく「トイレ」ではあるが、公衆トイレはきれいに使うという意識は少なく、消費的に使われる。それにより、公衆トイレには暗いイメージが形成されている。

3.トイレでは誰もが主役

トイレは誰もが平等に必要で、誰もが平等に訪れることのできる空間である。老若男女、身体障害者、LGBT、全ての人のための空間であり、まさに「だれもが主役となれる場」としての可能性を持っているのではないだろうか。

4.池袋、コロナの先は。

池袋では新庁舎の建設やハレザ池袋の整備、イケバスなど、先進都市への準備を進めてきた、国際アートカルチャー都市として日本をリードしていくというタイミングでコロナ禍になり、都市に人が出にくくなった。コロナ終息後には、今までのまちの魅力をもっと底上げ、準備が整った池袋という都市を身近に感じられるような建築が必要ではないだろうか。

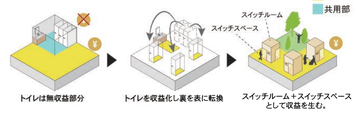


03. PROGRAM スイッチルームとは？

3-1.トイレンタブル比による表裏の転換

トイレ空間を占有していくことによる新しいビルディングタイプを提案する。現在のレンタブル比は、共用部であるトイレ等を除いたフロアで収益を確保しているが、本提案では、トイレを収益可能な場所とし、貸し出せるトイレの空間を「トイレンタブル比」として収益を計算する。これにより、フロアが公共性を帯びた空間へと変わり、裏の空間であったトイレが人々の交流拠点へと転換される。トイレ改め、「スイッチルーム」と名付けたこの空間は各店舗やコミュニティの玄関であり、通り道にもなり、新たに人やモノが出会っていくきっかけの空間となる。

■収益部
■共用部



3-2.トイレに広がる文化とトイレ広告

様々なトイレがあるが、大きく分けると公園や駅にある公共トイレと、居酒屋などの店舗に属する専有トイレに分類される。

居酒屋などのトイレには、アルバイト募集の広告や店主の趣味のステッカー、コメントノートがおかれている。これらは個性あふれる装飾や広告によりトイレ空間が彩られているだけでなく、トイレという究極にプライベートな空間においても、モノを介して他者とのコミュニケーションが生まれている空間となっているといえるだろう。ついつい見てしまうそのような広告や装飾はもはや日本のトイレ文化であり、店舗の広告枠として、表現の場として重要な空間ではないだろうか？

専有されているトイレには特有の文化が広がっている

3-3.スイッチルームとトイレの違い

■あくまで無料。収益はある。

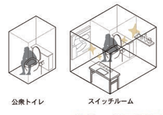
有料でも無料でもない、スイッチルームはその間の新たな立ち位置となる。

■空間が広告に。広告が表現に。

スイッチルームとその前のスイッチスペースによる収益化により、内部がレンタルユーザーによる表現の場に変わる。今までの広告はもちろん、これからはスイッチルーム内部に溢れるモノ自体が買える広告となる。これからは、スイッチルームで見たアート作品をスイッチスペースで制作を行うアーティストから購入するようなことが起こるだろう。

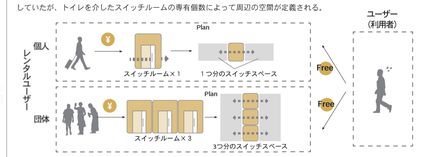
■綺麗に使いたくなるスイッチルーム。

今まで日本の公衆トイレでは、綺麗さを維持することがとても難しかった。誰のものでもあり自分のものではないトイレは無下に扱われ、暗い汚いが当たり前だった。しかし「誰のものでもあり自分のものでもあるスイッチルーム」というこの仕組み自体が空間をきれいに保つように作用する。



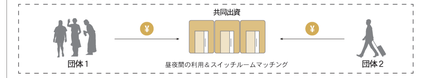
3-4.『スイッチルーム』のレンタル方法

スイッチルームの個数によって周辺空間をレンタルする新しい事業を展開する。今までは一定規格の空間をレンタルしていたが、トイレを介したスイッチルームの専有個数によって周辺の空間が定義される。



スイッチルームマッチング

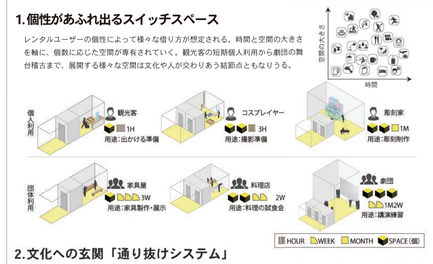
スイッチルームはマッチングツールとなる。昼はカフェ、夜はバーなど、昼夜間で異なる利用需要にも対応し、スイッチ空間が団体や個人を引き合わせる。同じスイッチルームを共同利用したり、ある団体の横を利用したりなど、スイッチ空間を介した利用者のカラーが出会いを生む。スイッチルームマッチングによって24h稼働し続ける都市機能となる。



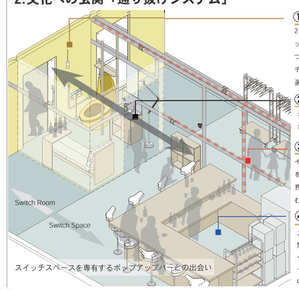
04. CONTENTS スイッチスペースとは？

1.個性があふれ出るスイッチスペース

レンタルユーザーの個性によって様々な借り方が想定される。時間と空間の大きさを軸に、個数に応じた空間が専有されていく。観光客の短期個人利用から劇団の舞台稽古まで、展開する様々な空間は文化や人が交わりあう結節点ともなりうる。



2.文化への玄関「通り抜けシステム」



スイッチスペースを専有するポップアップバーとの出会い

① スイッチルームの構成要素

2m×2.5m×2.5mの寸法で構成されたスイッチルームユニット、全ての部屋に便座がつ常設されており、そのほかにソファーや椅子、棚など部屋によって異なる構成要素から選択できる。

② 通り抜けシステム

通り抜けできることで表と裏を開く。向こう側へとアクセスする裏となる。

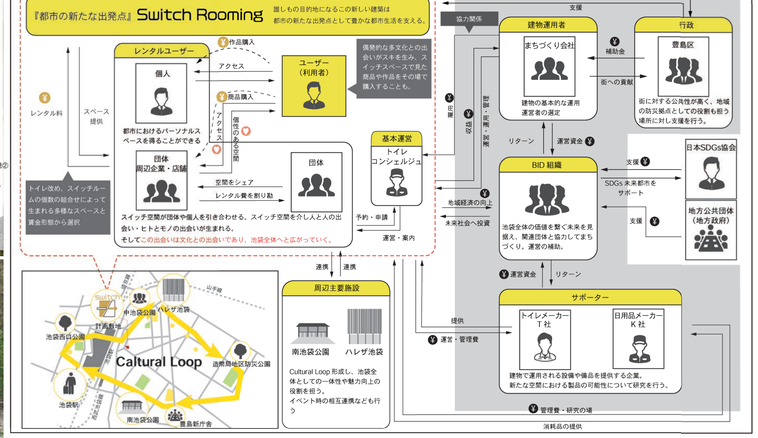
③ 配管による空間の定義

インフラ配管によりスイッチスペースの定義をする。配管によって緩やかに仕切られた境界が織り合わせの団体や個人との関わりを生むかもしれない。

④ スイッチスペース

スイッチルーム群後に展開していく準備空間である。裏の開閉により、パーソナルスペースを切り替え、時には個人のプライベートルームに、時には開放され、出会いへの通り道となる。

05. SCHEME スイッチして池袋と繋がる - 防災拠点や街の文化点と連携するカルチャーループの形成 -



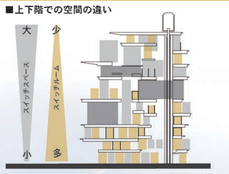
レンタルユーザー間のマッチングによる新しい文化の結節点

06. SECTION 上下階で異なるスイッチ需要と環境装置となる建築構成

スイッチルームの個数はゾーンごとに整理されている。下層部ほど多く、こまめに入れ替わるスイッチ需要を満たし、上層階では個数が少ないが広い空間が広がり、イベント用意などのスケールの大きな行動を許容する。

ずれるように配置されたスラブによってリズミカルな視線の抜けと空気の通り道を作り出し、ベンチュリー効果によって建築全体で換気を成立させる。

■上下階での空間の違い



スイッチ構成図

災害時停電になっても、３つの貯水槽により約13200回分のトイレで流す水を確保することができる。